十訓抄

四

第四　可誡人上事

武人云人い慮をくらべきを紙にかくしの
人の短をそしるを聞しめくすべく
孔子孔子曰しきて紙をそしるすべく
きりざるを我い何とかくいちして
いれざるかぶいそれく人れしつくいきどを
深く恥をばけうざるん孔子あるをき身
をそるかどの大事をあとをなどをのれ劔い
はらでぶんを物をそしるべを物をうしをるをあ
しきをの孔子つをべををの身のをくあらく

宮城藤井家書籍

ものゝ中にうつさるゝものゝ家のもとい基の事
きうせて彼者のあるやなどいひて人のもとをゝれ
つゝそらゝにおしうるゝ〜ゆゝ人のつむるものを
ばゝゝも純閑えゝうんつまてもうれいをすれごうゝ
がりてい面目なるゝ〜もうれいうゝぐめうへを
はしもべ〜多言下止也

一 行基菩薩荒荒恩寺の東南院うちく絵うゝ紙
反のもいろうゝ弟子どもに教へいゆゝめていくゝ口の
虎い身を被る舌鋸い金紙うゝ口紙鼻のおゝくに
とれば後ものゝ事をし虎いるして使ものゝに

人にもてゝ名紙のこゝにうれを書ゝめて彼遺言くゝ
ばゝゝくゝ今ゝはゝゝさゝそゝのゝゝ使ものゝ言

はの月のゝゝもれゝ和ゝもはゝゝゝゝ
ゝて自身安楽ゝて絵ゝゝゝゝゝ朔野金載云
人いゝゝて留名虎死留皮又云ハ是禍ノ門也
舌いうれ禍の根也善生經曰使口如鼻絵ゝ多事
などいつる文紙思ゝくゝ中ゝのゝ人ふしゝゝ又
老子傳ゝ多言害ゝ多事ハ害神ゝゝゝゝ
ゝれべゝくゝはゝゝいもしべゝ人ノ言合
ゝ事ゝゝゝれまゝ百人ハゝゝゝ交ゝ居ざ

らんかいどうのびたるあく行合うち丸
ぢんゆうゆくえのくべし世文のをくへちう
(二)雲面領法寺亀屋こいつ人をうち年はれ和方と
このうちれど宜さ方もとみおさどうきれべんう
常に人丸氏今どうふあるよれ寿よ西ぢうちく
世ばゆう有う太いちくて梅花ぢう雪のおくく
ちうまくいつくのうべしうをうふ丸さちうそく
と世よ人ちどふうさいうふ年あうれ人あう真衣よ
うすいうれ持典紅の下の袴をきくちうる烏
帽子をしてをぢり的尻いてうそうて常の人さし

仰ぎうけたのもし帝をして古のもん筆紙染て
物紙書どる書きあつめて彼人に申て
ひぐ小此人いつ年は人あ紙ようをつる其
さろぐ浮より彩紙ふまをづりして
うたちあ夢ゆさめく後朝り経師をよびあ
此紙ふうをそうをれど仰ぎうれいさびく
うをて仰ぎうる紙寶みて常にあうれば
そのさろうや寄もんさたくようもうあさ
寄ようあ紙ふう年はあうて彩をうるうれ
白河院よ進ようれいびうふ紙ぐをもんて浮寶

の中にうく鳥羽の寶院り紙ようう六条
修理大夫彩憑ひさはぐに成くして信茂と浩て
書ふうてもうれううう新光よ演作をて祇
伯彩仲よ清書さをくを寄るうて好く新法也
らをうふり舞達多れも其道の人をれ
ぐて後新朝臣の信脳いをう紙ふてうろ
新仕紙をうぐをうう書れ長寶々家保をう紙
をうくこ男彩憑ひ道て情うれば讓得
ううう紙院よ進をうけうう紙浮感寄うる
と長寶浮前み作をるぐそれむやあうをを

人丸歌共を蓋ひづき文あらば色紙一枚よい
をうつくしうとはづやさうくれで院の清家色
うつりて為るもくれば立々紙色しうへして海さ
いでう歌おそうこの事をいりで源夢よりとお
うしてあざなる出くもれど兼房さうものしてこ
とのわにうもる事いあるどもおいて我清き夢
物乃間よ用て年に付てよりう海が又憑りうれと
いくもいて久くもうるめくいうてうあはくいさ
うへらぐ不當の事しうていみくもうくせ
まいくれいくうぐく出くく年中いくい門さて言ぶお

さく秋ざうくうおまていつくそと彼歌の之う
なるふくるわを文
三 堀河院清涼殿中宮御清方ゆ半物よ砂金を
いひてをくびなれ美女をりまう長庫院源仲四
あれとをる真は殿乃家駒の人く略并歌う
集うて酒のくける次くある人うの砂金ゞ事
をくう出くて一日間裏よて祈り出くうしうぎう
あまば天人も見てはは海さくどくうれをうくしゞ
世よあくばうあうなるうの歌うて古のよう思ふ
あとせまかくを秋と文鬼をあり歌も物ゆう

ことわり人なる武士はわきてよろしき物で思ひてはべら
らで無沙汰にしてすみすみと云佐實といふ人なり
しなうさる事然してゐるや武士も女のうへは
なるも物也己にはをとなしくどふにならで仲忠いりあ
辛すかしも其さけびと云より何然あしく云なん
仲忠が事然あさましわたく世にはいひたれば世
人には詞をくれして此みたり此事彼の中に言さる
つもりん仲忠なり出て安からぬなり男ともいふ
がすべき彼弓矢此本末まれば欲よおもの孫ばよし
なき事なれどさるとてはくやしみてよはや安からば

てあらけりわけてさみとおもふなりとといひ合たれば
いと安き事也とて夕闇の比敵よりおそりの然まち
うけて東より引わけてさる事いへども世にあり忍ばせ
さきてゆるしけるにもれしと仲忠が郎等のなかにあて
とり物のさるもまれば なさけもあはれもなりしを
因武者乃一人有たるがこのよしを待まれ
馬にて馳来たるが今わかれあがるまで小家にうたひ
いらじとしける時約合く何としいそぎてなどかく然
押切く仲忠がめぐみ約く是なりんといひければ
仲忠わかどもそれで不思議の事なりと云なから

うしなひたまひてしばらくとどまり給へる程に彼
母のあらしのくにより外にて出されとかぐらを乃
ちとやまの屋に院きこしめしてたゞ人をもつかはし
てをびただしく法師あるを給へる程に彼寅おもてをさ
ゝめ人をいつゝ出でゝ仲心しあるべし
とけうをよりて主の罪はあるべきけめ切
るものを基とをうふきこしめして其日即名
をかへり跡紙をゝして失ひ仲心ちゝ及ばさを
をれば院内にまづいて其ゝ盛重が検非遣
使にて作名紙此おとゝを切らうと云男様へ申

らうとゝ法師をよびて作名紙をしたゝめて内
をれがゆゝ紙をまづ母の尼公が家紙朔夕毎
ゝうぶいろうほうぶふある勧朔ゝ法師の女
乃姿をして門をもやくまゝ来あるゝしこれいあるべ
やあや先ゝかゝるゝをを同母我いかゝまゝ彼
彼人乃真伝い清水坂のもゝ代ゝ其使よ
ゝまゝきるべゝ也ゝあるゝをきゝをれば つは
師をいふをすべきみい師ゝどかゝこの知べき料也
ゝて行へゝゝゝもゝ代ゝ中ゝゝ打ゝゝかゝゝ
ゝりよかゝゝて思ゝいもよゝゝゝなゝゝ事我ば

まづしばらくかくして帰る盛重といひしは六波羅
より刑部卿忠盛召抱へし其侍なるがうかれ
なんどおこの事に成りけんずらしくすゞろなる法師
をさゝへてむかしきゝのみぬるくるしくへやりし真
の老法師人をくらして祇園中路と云ふ所よりまへ
思ひやりに居りてぞありさまもみれど忠盛ようすみ
やかなりしがみさだすごしてぞ其時清水大宮
おもりて此清水寺の身をもてそこなひし人多かりける
本より昔よりこれなしうまいし地しのさめたるとも
別當よふれて此かくわられめて群集りて

みを通さじと志ありければまづかくして懐より巻
料紙に文を作りしおくりしにぞ解ける
ではかうもあらんと彼よくかきおきせじとかくしつゝ
が披露はさせじ此おもむき別當のもとへ解ける
請文これなるにそはしこれはさそいだ若り
及びければ通してぞ此法勝院きこし召して
ゆくゆく感じやがてめされたり此男なり同じき
まだ若かりしど切紙りしとぞまた給仕も當
ゆるさめ家にきこしめさる度にうられてまさ
盛は此位寮が本どりこそ彼さる事のゆゑに

実房ふとくふうりうなんやと作らるに事にて作らるべしとてあさ服り小面よ素忠ぐ作らる紙いざ
さ多人乃ゆ人酒のくふ小ゆるに使いまつらい
くれば所のきりくものをれば引ぬ秘とらいて相奥
多行いぼくなんと秘と人なぐふ此佐実ゆくく
行て事の次作あくくさ面くの事ゆい合ゆるか
ぐふ二所ぐうれ所よくりあるぐ酒とそのまま船
くりなぐふ我ゆ人をと奥ゆ入くあるぐかけさす
とて思ゆるゆくちくゆ疑ゆられて所くあるまゆる
ゆうて烏帽子とはさ秘ゆ保ゆるゆ保ゆ

してゆて作くぐて又れいわぐゆ紙ゆんゆくう編
多多ぐゆと服ゆる也素忠ゆくをゆけまび其
所ぐ此秘人のゆあ所ゆくひくるて所ゆけ盛重
いゆゆき誤ゆ為ゆくゆ秘ゆくれくるくく事ゆあね
まは帰ゆて所ゆ紙ゆて其秘人のゆふ相
奥ゆて作ゆて奏ゆき事秘び一人まゆくゆくゆ疑
秘ぐゆゆ所ゆ作ゆと秘人奥ゆる事秘ゆ叡
事也と作感ゆまゆくて仲正罪ゆふ事
所よくゆくれど秘佐実ゆぐひくるゆまて
出仕ゆるさくる紙人多ひくれどそのゆ其は

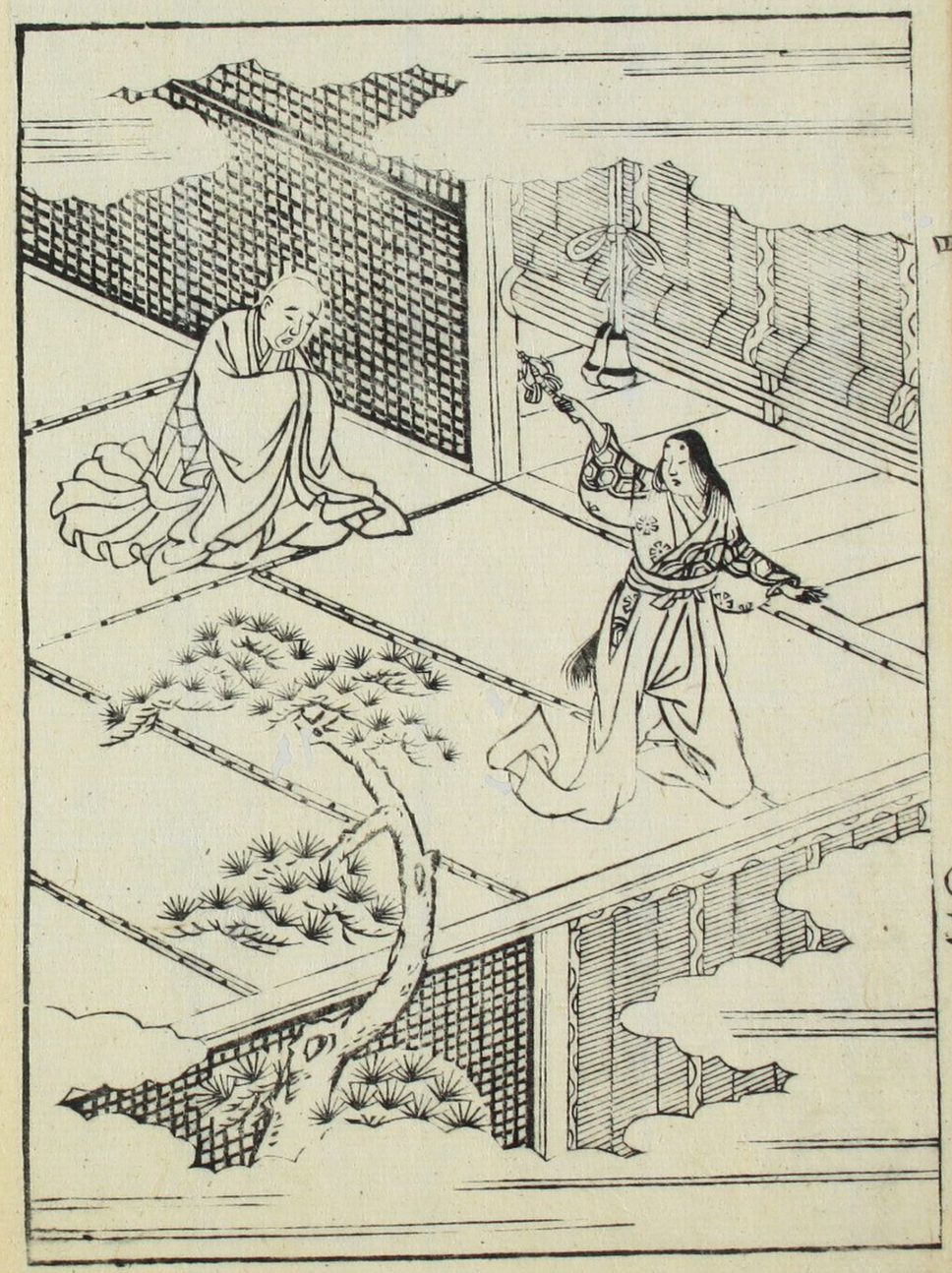
花園の中ぐいまぐつさせ浅く埋しくるふ文清
師うそ惜全敦西くいひくるうもの美くう才芸いとも
お宵くうめや此作爰花園敦よまうて物語ア浦よ
清文の幸いいんぬ作爰とをれいべさ物と敦西
ほとも中うもいいぐとて作ぐ浅事ア紙ア書き
きびいいびどをうくあぐうめいちうしい移よ實とや
ちきん番ふくていみしき秀句とうをうう結
まとゆいと奥ア幸うれいうふと同うあう宵
花うく敦西ふく春霞紅とをあうぐの敦西い移
ていみしき秀句也と感移うれいべかこ作くあうくう

清文のつくれく物ゲして敦西ぐ海いうくうくふ
こうて作爰作くを移くれいべ大ア怒く紙ア矢面
舟ていいぐ仲西ゲ毎うれない月とアとべしいくぐ
ちう源く作まくも出くふ身よ似ちうぐあう此下句
とくを付作くちうて爰句ると作爰園と冬雪白
くぐ付くうけうあうぐいいみしく感ぐのいくう世人
うのくう物語ふして奥うくく移くう

四 右中弁惟家くと人宵をう賀茂社ア事ア
宵くう紙ひ人ようきくうれいべ世の事よい神と仏
と歌ア源く物くしい源とぐとくいて移月う

なりつるとけるふわろ女房の賀茂社参り通夜ちう
ろう夢ゑ武者の姿ちうろ老紙免して惟家の手只
今ちうくちうれと作ぐてあるる紙ゑく出あてちうぐゑ
紙ゑく帰ちうく大般若経とよ見ちう作河ちう入
べき道のいくわちうろれば成雲の角ゑきてれさ侍
のちとわちうれと御事あるちうみく不思議ちうて
暁下向しけるふ京ざゆちて人ちう太平年般儀ちう
今夜失ちひちうてさつだちいてあちう海しうを
ちうさちうも宮く大般ちう法七物ちうぐし
けるをん

五 文能民部仍徐慶僧正を尋紀侍ちて人の妻紙
するちういてぐう侍正此由ちて勿ち民部の絆
へちうち紙ちう民部仍真ち紙得く所望の由いて
あいぐうれば侍正粉ちう文章ちうちうゆちんを
宮ちれども出ぐうちう紙ちうべ投出ちて加
持ちう紙ちれば厚風のちう投出てまぐい初く
ちう紙ちう紀侍正ちう紙ちて中ちう文能い三
日ぐうちう紙ちうあちうて文ゆ中ちう侍ちう子
引具して二ちう紙侍正ちて命いちて
六 中納言通俊ゑゆ世ちう阿闍梨仁俊ちて歌窓



紙法師を貴さ人おもひける紙鳥羽院よりいろ女房
仁後いかなるものの空屋を立ちぬと聞くに紙ふすま
きそはれと思ひをれば北野の参籠して世紙と
すれども人と形請して
新も神ちかいをもんと人のみちいそぐこと
ゆよりも人々れば真女房赤袴ばかり紙腰よりまとて手
に錫杖をおく仁後と立ちぬ新しいと云
て院の御所ありまくに辞ぬ法ぬと云
ぬ中ばかり仁後とおくるを紙々れば神恩の
あらたなる紙感じて涙をながして一度慈悲と満

めしたがいなく房中ちかく寄めかくいみしく恐れて
うすぐろみとなりて清馬をぐぞみぐいうる
(七)雅縁阿闍梨と問えしに何の意なく有えん恵恵
僧正紙澄紙閑倉の人とうるしこ雲紙に付うきを
つま恵恵冊事紙問て憤りて紀請と書て三塔
より披露をうる所其詞云
若破戒無慈悲して天台座主任をしむ
て悪狐類を先賢より強し振藉と後輩に強
さ者也依て今三賓に向なりて冊事を
披陳ス

此うるけるものら雅縁三塔紙走めぐりて法紙
披律の人に空言をに付るむしそうらい歩く
きけるぞこれも又物紙雖じてあきをぐらいな
つをうり
(八)九条殿右大将にて玉いしうる此濱波三位の聟
より取寄りてあるうしい少をうるに常に和尚に沙法
寄きう清姉朝臣に来く物ぐうの次ぐ一日新船
住師をうる結うしい大徒大将流さし結うる日陪位
惟成をうる紙来をうるに蓼海法をうに秘曲又
新へうをを

そへとくに絃のみに思ひけん所は青海の波に流さん
此よりまてく伝へたる管絃のことなれば和漢に伝ふかくそ
仰あまて云出されしより名高き蒼海波といふ名の
こそ聞及ぶ所の何の文字にとられたる絃なるを
しみの波と書かりし蒼は清くは青海波のかきれ
ことあれとてかしこたる清浦翔の云青海波
あれば人やは有べきさなる曲なりとはいへども人なよ
男はどもそのうち主の三絃若もさる曲もあるらん其
道の人にしるべしとて大将殿の琵琶の師に
て有ふかしらやりけるに此事紙とりたるかき得て

さしげくてあらひたる絃音のまさにいたるべきさまに頻に
もちゐて絃をれバとどめしちくたく絶たる物にて作へで
気力ぬに作し出ゆえたるに作くは有たらうそれハ此のは
作の撥を作る蒼水羽琵蒼海波を作たる皆秘曲
あり絃れど絶されバ大将も志らられずて出ずまで
とそへ給たる此御伝也と出ゆ武人伝て作と
てハ作りたと仰れ事まじバ皆作也琵琶によりて
けれバこそ今ハ絶て作るやと出ゆもちらう事有る吹
此より今の彼人で悔しくてなくさめかへたるか
伝る彼琵琶の師二条院に参りあひたるに

蓬海波の篇の所作恩蒙りて作しうる恩徳忘れがたく
作まうして清輝いとくれなる此曲い現れに易水曲とて
物の数を筆にはらはて作也盤渉調の音也
九 二条院御遊あり公忠朝臣笛
ける所みなべ御琵琶にて律の音紙にせまひ
なくに只おなじ紙調べて律の声引べきなり
とおけもべ御笛共錯と志なるべきなり
あり事なるべ御笛なるべきなり
なるべ将律の音紙にいくせ
うまさに旨いなるべ作事方きれば紙調て

のべ中人なりなり
十 後江相公登省の所詩作り兩音紙平調に用ひ
しなりける紙時の性仕達落ち雲しなれば相公
感音み鶴元千里未離地と天神此作と称
くけまどもなる紙に調入ざれば作りも管弦相乃
作り秋に事も調音に作りもと管弦相
も調にいく法儒の才智いとなりも管弦相と及
でなる紙早く及第すべきよし勅定とくださし
うばらのとる紙性仕ぐも数を飾く止まなり
十一 天暦御時月次の屏風所に樹衣不と義豊詠云

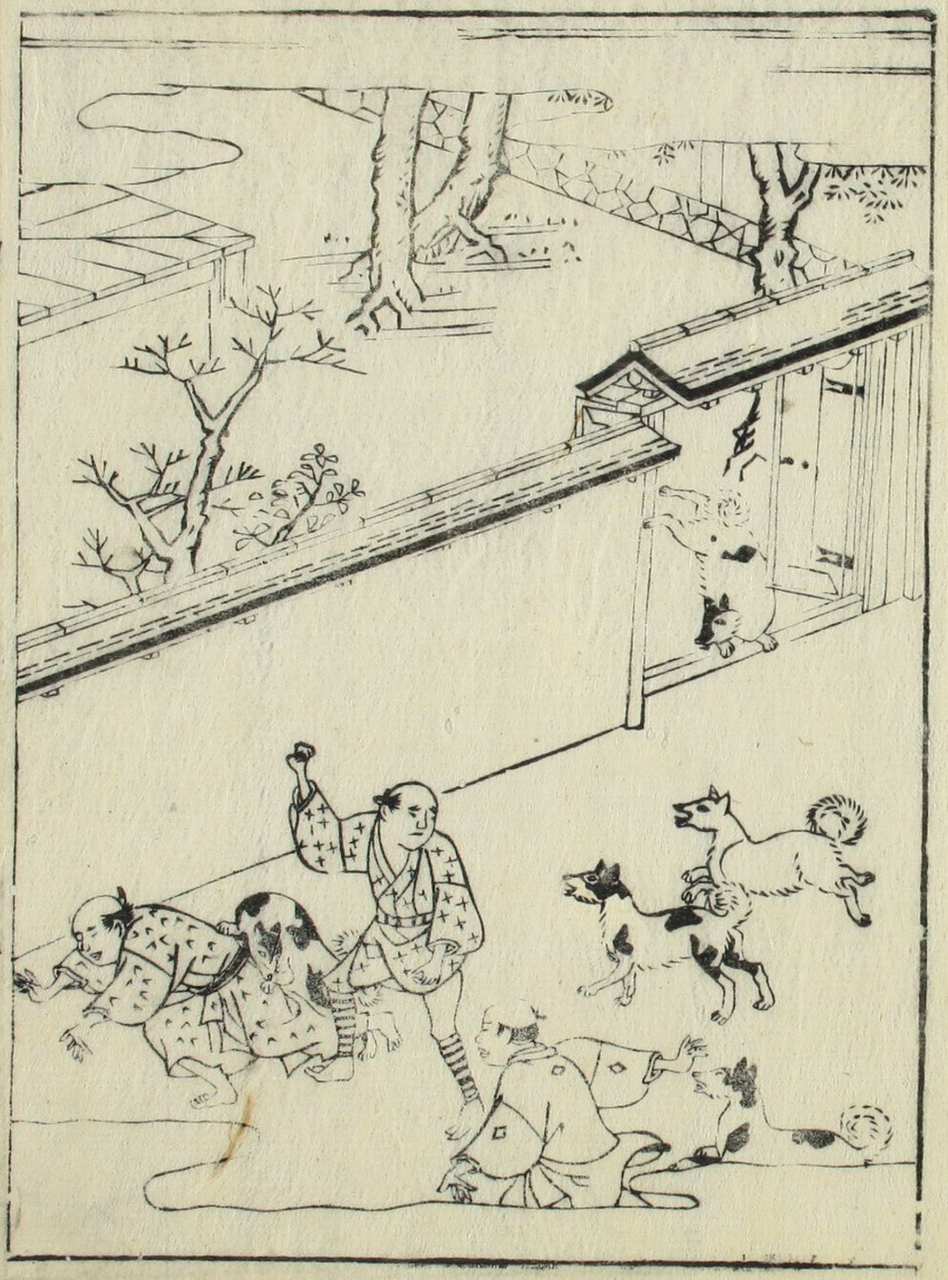
社ゝてこそ弁慶の数珠也ゑんくさとなるやきゝんん
紀時文仲の名所形と書こそ紙押に衣を打と
ゝくゝうべきはやこゝろあらんと詠る此何事也
尋らるべし云

あ[illegible]の関のこゝろよ新て今やしらん月の影
ゆゝ詠る此歌こそ必何時文只紙問こゝも時文い
貫こゝろ[illegible]くかく歌しけるいふく流ゝ
(十二)たゝ京右衛門張季新院御番所百首より見
ゆゝいふゝかく作ゝ者をれば智ゝ事れ
いとゝはけまゝ由ゝゝや百首ゝは問ゝ文字の

白ゝいよ問ゝなゝゝ問い此何と問を給ゝれば
まいいゝ行ゝ百首まゝてゝ物ゝれば問白りやん
わゝんとゝされゝゝゝ公行がさいゝゝを作ゝ
ゝれば云作て堀川院百首引ゝゝ赤宮定公実
ゝの言にすゝる蓋の両歌ゝ秋風ゝゝ上下の
ゝ並て有ゝゝ歌首紙ゝ書て九月十三夜に
今ゝ赤ゝ公行ゝゝ是い此何とゝんをけまば
問口ゝ秋ゝゝ公行ゝい公実ゝ乃孫也ゝれい人と
ゝて歌ゝゝるゝいゝゝれゝゝゝ問ゝ紙
(十三)良暹ゝ言にまゝゝゝゝ云事紙ゝゝゝゝ作

古神宮圍碁図てうよりこれ来やい宵やと雖ども
やうかの衣まくらもすゝ高しあり此何圍碁俳家
なるもやよまつりてこいつてもうもうさう紙うとこ選ばる
ゆうこ云良選ばづく業づて古今に
風雅の業ようれるくさつれあう本号に麻さうまうてよ
ゆて結まい思てまつるまてとあやまれるかくいつ圍碁
いつて事ようゝ
花園大臣の浄作よ好くまてる侍の名簿のそこ云
う紙い云うみとさうう厨の秋の稲く南厨う
出くけこうのかう紙花して抜くしけるが書ども

樹の下み人まれて作る紙うる歌人立位さうして人も
作いあうとして此侍の手うる紙さうでもの迄抜うもを
ゆもれば手うるみ抜い云うもうえとゆもれば畏
高格子抜うり作て作よ此うとうう紙いゆや一首
つうもつまと作うまれば手物のうあみうとい
しうる紙作うる女房うう打くあうばうとしうげ
まて作うい出てうう紙物紙きくうてたりうゆうや
ハゆゆ作う紙てうく作れうまれば
一 主称のみうれ手紙うう長七夜へて紙をうう識いゆく
やうもんうけまば歌うう直垂ををし出て結い



きてあり

寛平秋合よ神石と友則

恵度ちすそいあ原ろ〻れ今そ伯なる秋雪のうた

ひとあるた方ゝて雪をるに多ゝ平紙涙しうろる

用太名の人ちらぐそひろひうはく浪の白にみすて

いあれていろふうを音もきだ風よろれ物紙雪

とそそびいさひだくうふ年雪風ぐき年也

風さきあうに世ゝいうをくくもむきだるやまき

ひあて波のあやまろ紙ちくくも紙ちくるゝ

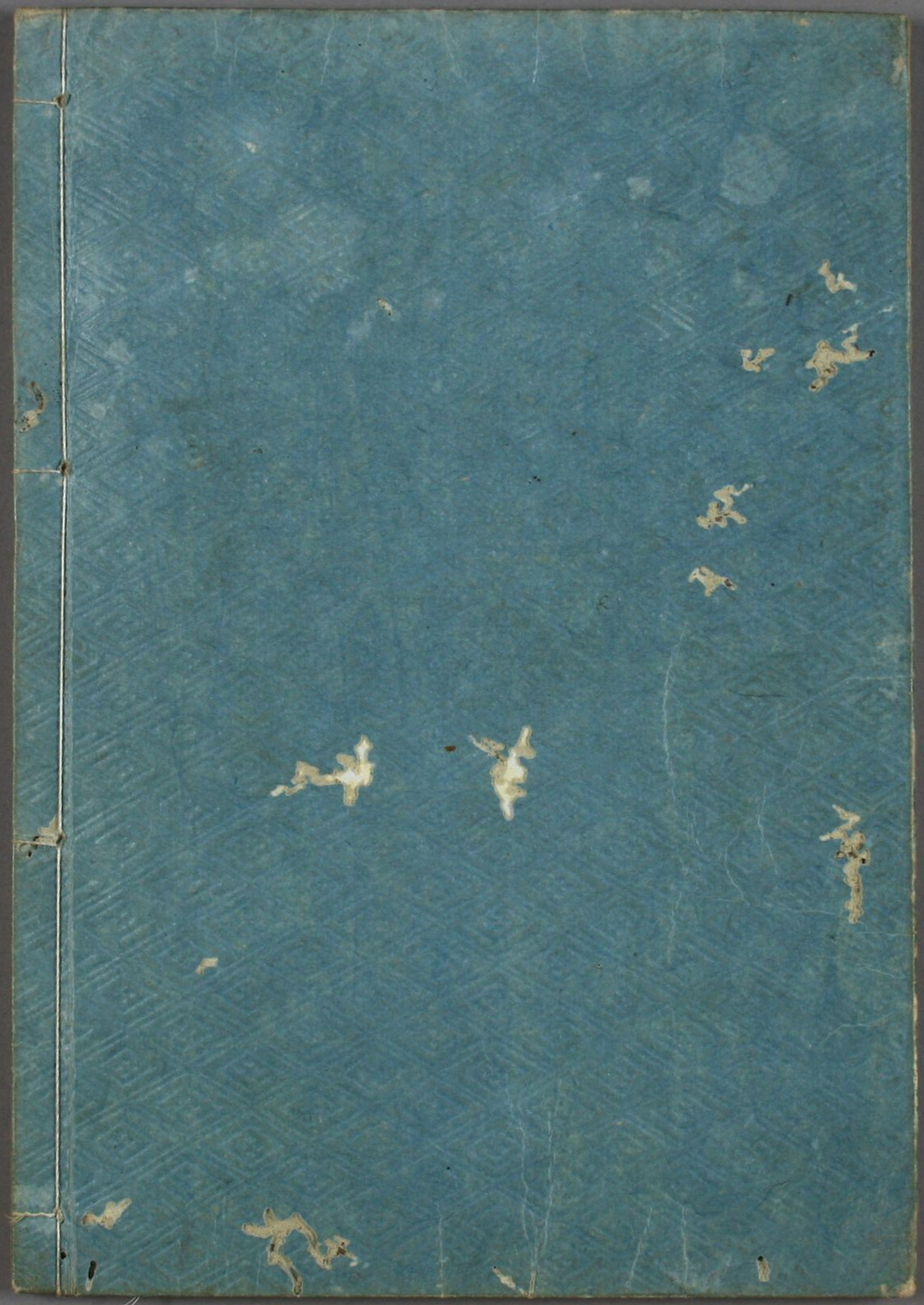
のふうんよ波ちふ雅ぐそちうそも行うきを

十四 昔播磨廣根とて名誉の物生ありけり昭宣公の表
をもて勅答作りふ以阿衡を仁為公之任と
ありける時の儒者佐世これを見て昭宣公の御心ふ
かくて君に按ずいのごとくなりけん阿衡を位
なれど按ずいをばとりけるとかかりて人ハ
世を仕ふまじきものなれどて清涼殿の馬ごとに切放
されとうなれどいみじくなきとうれしう馬ごとに高申
ふ多くけるとけり式人あやまりなりなる程よ帝
きこしめして大なる御ごろうをのいて勅答をつくる
けるのこれあるを廣根紙ごとに切ごさせ給ひ

乃て其宣命に勅答紙作る所人廣根阿衡を引
高腹が本意ありもとめられる廣根はるを安
りばらしてなん後大とぬく作世紙くらんといて
失ぬりうのうち佐世が家は貧より始く大路よ
赤きをおもも知りく考うと散く阿衡をと嗚呼
人をくいうり河内人おらざり紙阿衡をしたん
いいうる佐世がこあるよりいうれもいかうこと
うをうのら贈官の宣旨ぐさるとて昭中
納言とつくれる世故ありやうしく世事奥記を
中の事ありけるに官恵相いまを侍従清伝法

なしてゆかるかてとて歌うをひろう明經ていい
善淵愛成紀伊よい藤原息佐世等毛詩尚書漢
書孝の文を引て執論をなすといへとも是人ちろ
ひ給ひぬと其文よろれいじを作給ふ藤原家伊
清息よい廣相あやまりなる事紙の有紙のせろれ
てのれくろ

大府先出施仁之令諸郷早停新飛之宣
ぞろれる廣相これを聞て悦ろ先くな程
つく芸学家の清夢ぬ廣相まく甚悦ろてこ
乃金物を授ちろろ我こ公ぬのびる志ろ也

ろぞ作ろ後ろる果て奇紙失いざるろ
十五 公任の家にて三月盡の夜人々あつまりくれ
ある事紙惜ム乃奇をよみろる長紙
ムろ紀年ぬ九月余九月とつよ去ぬ事ある
大納ろうろ文てぬとあつぶど春い世日やいかていて
ものろける紙閑て長紙被遠ろ文ぬ出ま
事ぬ文て文ぬ手病紙ろて限也ろ文て人をたろ
いろ文れいろうろびて不仕給ろ人まろ世疾去手こ
月盡ぬ日春い世日やいあるを作ろ是いしれ文ろ
事ろれと所ろ疾ろあるのろ物ろれ作ろ

ざりしより叡慮なりて行なはれて世く其の失
ありしを大納言のかれ給はるを是いかゝ
しらはせざりしなどもさぶらふ
ものにうるく雖ぎられけるいてゝ後のしの
(十六)一条天皇清涼殿
蹴鞠のこと有きるに
と其中れ公任卿此鞠
人ゝをぶしやいとれ給へ行成卿
ゝて日特きれおわいとみ
いきゝつれ侍きやのてゆいゝ
の非愛なるこそ世きる彼行成卿に指図伊平
公乃侍るおわ義孝はれ侍る也結命ありてゝく失
給ふれば大長大将ゝのがゝどそれとれもゝて
公任卿ゝさるく孔孔子路紙ゝ給ふ和義一人
値ゝり孔子ゝ向くこ度ゝとあて物をいゝぞう
乃ゝ孔ゝとれと業ゝ給ふ
なおしそやゝ
ものゝ多言紙出ゝ
うきるハ世事也ゝ